

シシヤモの香り

鈴木将史

私は昭和五二年に北大文類に入学した。当時の北大は、文類、理類、医進、齒進、水産の五課程しか新生の所属先がなく、入学後の成績をもとに、二年目後期から各学部に移行する方式だった。高校時から特段の目的もなく北大に進み、ビジネスマンとなる気概も持ち合わせていなかった私は、消去法で文学部を選んだようなものだが、漠然と「英文にでも行こうか」と思っていたところ、定員二十名の英文専攻の八割強が女子に占められていたのに恐れをなし、更に英文専攻に首尾よく入れるかどうかも分からなかったため、そうした希望は早々に捨て去った。人文学部に移行するには、当然のごとく良い成績を取らねばならないが、文学部移行自体にはそれほど点数は求められない。ただ、文学部に限ってだが、専攻間の移行点格差が激しく、例えば英文や国文や日本史などといった人気専攻に進むためには、法学部移行より高い点数が必要と

なった。そうして二年目過ぎまで移行先に迷っていた私が選んだ先が独文研究室である。この選択には、一年目のクラス担任兼ドイツ語担当教官であった岡崎忠弘先生の影響が大きい。六つほどあった文類ドイツ語クラスで、文学部文学科独語独文学専攻に移行した学生は、岡崎クラスの私と寺田龍男君（現北大）のみというのも、先生の影響力を物語るものだろう。そのエネルギッシュな授業に啓発され、ドイツ語を好きになり、学部移行選択時に相談したところ、「北大独文の教授陣は日本でトップクラスである」との先生の助言に、独文移行を決心したのである。

移行してみると、独文の定員は十名であるにもかかわらず、同級生は寺田君と、理学部から転部してきた高橋修君（現北海道教育大）だけだった。上級生も、後に入ってくる後輩も似たような人数で、定員を満たすことはまずなかった。おまけに、文学部に移行したものの、志望専攻に落ちて不本意な専攻に回されたため、それなら少なくとも文学なのでと、独文に入ってくる者もいた。教養で二外にドイツ語を選択していない者もいた。独文科は、とにかく文学部にさえ移行できれば、誰でも入れた訳で、学部内の厳しい競争を勝

ち抜き移行してくる隣の英文科とはえらい違いである。だが学生研究室は英文よりも広い部屋があてがわれ、英文にはいない外国人教師がおり、授業出席者は多くても精々十名程度と、かなり理想的な学習環境にあったことは確かである。当時のスタッフは、独語学講座教授に塩谷饒先生、助教授に川島淳夫先生、独文学講座教授に青柳謙二先生、助手に石橋道大先生という布陣で、岡崎先生の言うとおりであった。この他、北大独文で特筆すべきだったのは、大学院生と学部生の距離が非常に近いことで、当時博士課程一年の川東雅樹さん(現秋田大)、岩井洋さん(現酪農学園大)、修士課程二年の梅津真さん(現北海道情報大)、岩田聡さん(現北海道工業大)、修士課程一年の小澤幸夫さん(現神奈川大)などの方々と、研究室での交流はおろか授業も一緒に受けることができた。学部三年生が院生と共にマイヤーの『ペスカラの誘惑』や、シラーの『ヴァレンシュタイン』講義を受けたりしていたのだから無謀といえば無謀である。しかしそれも北大独文と、妙に納得するところがあった。先輩が後輩を捕まえて行う「読み合わせ」もいろいろ開かれていた。そして今にして思えば、先生方や諸先輩方、或いは後輩

たちとの研究室での語らいに、北大独文で学ぶひとつの価値があったように思われる。OBに水産加工会社の社長さんがおり、研究室に送られてきたシシヤモガストープで焼きながら、一杯やったあの味が忘れられない。(研究室が、その後しばらくシシヤモ臭かった。)様々な出自の学生が集まる文学部の「吹き溜まり」のようなこの独文に、もつとも文学部っぽい雰囲気を感じていたのは私ばかりではあるまい。言語文学専攻という大枠の中で独文専攻自体が消滅した今、北大の独語・独文学研究室はもはや吹き溜まり的存在ではなくなっただろうが、あの雑然とした雰囲気の研究室が失われた状況に、一抹の寂しさも拭いきれない。

最後に私事で甚だ恐縮だが、昨春愚息が北大理系に進学し、ドイツ語を選択した。担当教員はなんと寺田君である。感無量とは正にこのことだろう。教える彼もやりづらかろうと思ひ、鈴木の子であることを隠し受講するように言っておいたものの、息子は良心の呵責に耐え切れず、成績決定後、彼にカミングアウトしたようである。寺田君、隠してごめん。そして秀をあらがとう。

(小樽商科大学教授)